キッザニア白書
2018

KidZania®

刊行にあたって

これまでKCJ GROUPでは、大学研究機関によるキッザニアに関する研究結果をまとめた「キッザニア白書2014」及び「キッザニア白書2016」を刊行してまいりました。このような積み重ねを経て、今回はさらに研究領域に広がりをもたせた「キッザニア白書2018」をお届けすることとなりました。

本誌では、KCJ GROUPの独自研究として、東京学芸大学 松川誠一教授監修による『キッザニア体験によって醸成される「生きる力」』、青山学院大学 アレン玉井光江教授及びテンプル大学大学院 根本朋子准教授の共同監修による『キッザニアにおける英語を使った職業・社会体験』、関西学院大学 甲斐知彦教授の調査を基にした『キッザニア就業経験による学生スーパーバイザーの気づきと成長』の3例の研究をご紹介いたします。

本誌では、キッザニア体験を“キャリア教育”と“英語教育”という観点からとらえて分析しています。また、こども達にとって「職場のすこし上の先輩」であるキッザニアのスーパーバイザー達の声を披露することで、こども達の体験がどのように育まれているのかをご覧いただく試みを行っています。本誌をきっかけに、より多くの教育関係者や研究者の皆様にキッザニアに興味をもっていただければ幸いです。

CONTENTS

刊行にあたって 01
キッザニアについて 02
研究1 キッザニア体験によって醸成される「生きる力」 05
研究2 キッザニアにおける英語を使った職業・社会体験 11
特別インタビュー 15
研究3 キッザニア就業経験による学生スーパーバイザーの気づきと成長 17
おわりに 24

●こどもが主役の街「キッザニア」

キッザニアは、こども達が職業・社会体験できる屋内型施設です。現在、世界19カ国24都市※で展開していますが、今後新たな国々においてさらなる広がりを予定しています。

日本には、「キッザニア東京」・「キッザニア甲子園」があり、両施設ともに、体験できる仕事やサービスは約100種類にのぼります。実在企業がスポンサーとなったパビリオンが約60あり、ユニフォームや機材及び食材などをご提供いただくことで、体験のリアルさを演出しています。また、キッザニアでは専用通貨“キッゾ”が流通しており、仕事をすることで給料のキッゾがもらえる他、銀行に預金をしたり、キッゾを使って買い物をしたり、サービスを受けたりすることができます。

パビリオンでは、スーパーバイザーと呼ばれるスタッフが、こども達を迎えます。スーパーバイザーは仕事の手順だけでなく、その仕事の意義や本質を伝え、仕事を一緒にやり遂げる“職場のすこし上の先輩”という立場からキッザニア体験をサポートします。

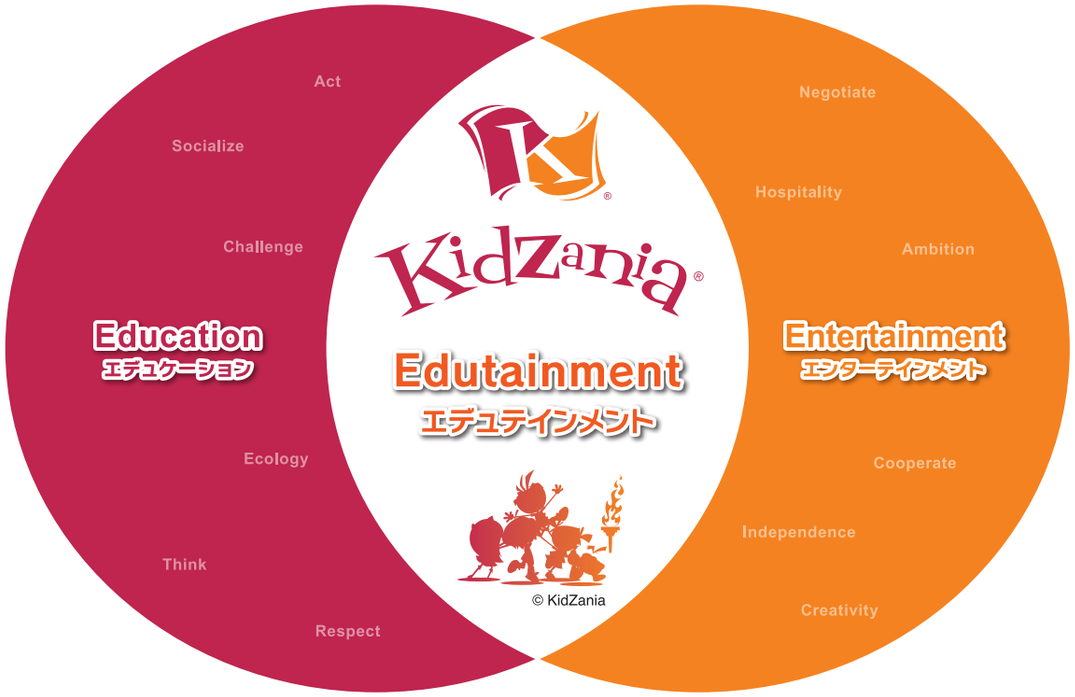
キッザニアでは、これらの職業・社会体験を通じて、こども達が“楽しみながら学ぶ”ことを大切にしています。学び（エデュケーション）と楽しさ（エンターテインメント）の両方を兼ね備えた、[エデュテインメント]な場所、それがキッザニアなのです。

※2018年3月現在

Get Ready for a Better World®

●「キッザニア」のコンセプト

キッザニアは、リアルな社会体験を通して、**こども達の生きる力**を育みます。



「キッザニア」が育むこども達の生きる力

考える力	Think	協調性	Cooperate
創造力	Creativity	社会性	Socialize
行動力	Act	自立心	Independence
交渉力	Negotiate	エコ精神	Ecology
チャレンジ精神	Challenge	ホスピタリティー	Hospitality
向上心	Ambition	尊敬する心	Respect

●パビリオン一覧

- 医薬研究所 (甲子園)
- 印刷工房 (甲子園)
- ウエディングセレモニー (東京)
- 運転免許試験場
- エコショップ (東京)
- エネルギー会社 (東京)
- 絵の具屋 (東京)
- 鉛筆工場 (東京)
- お菓子工場
- おしごと相談センター
- お笑いライブ
- カーデザインスタジオ (東京)
- カーライフサポートセンター
- 科学研究所
- ガソリンスタンド
- 観光バス
- 銀行
- クライミングビルディング
- 警察署
- 警備センター
- 劇場
- コールセンター (東京)
- 裁判所
- サッカースタジアム (東京)
- サラダショップ
- CMスタジオ (東京)
- 歯科医院
- 自動車工場 (甲子園)
- 住宅建築現場
- 出版社
- 証券会社
- 商店街:画材屋 (東京)
- 商店街:花屋
- 商店街:はんこ屋
- 商店街:筆記具屋 (甲子園)
- 消防署
- 食品開発センター
- 新聞社
- 水道施設 (甲子園)
- すし屋 (甲子園)
- スポーツクラブ (東京)
- 精米工場 (甲子園)
- 石けん工場
- ソーセージ工房
- ソフトクリームショップ
- 大使館 (甲子園)
- 宅配センター
- 地下鉄 (東京)
- デパート
- テレビ局 (甲子園)
- 電子マネーセンター
- 電車 (甲子園)
- 電力会社 (甲子園)
- 動物病院 (東京)
- ドラッグストア (甲子園)
- トラベルセンター (東京)
- 発明工房 (東京)
- バナナハウス (東京)
- パレード
- ハンバーガーショップ (東京)
- 飛行機
- ピザショップ
- ビバレッジサービスセンター
- ビューティーサロン
- 病院
- ファーマーズセンター (甲子園)
- ファッションショー
- ファッションブティック (甲子園)
- プリント工房 (東京)
- ペインティングウォール (甲子園)
- ベーカリー
- ボイラ施設 (甲子園)
- ホースパーク (甲子園)
- ポストレコーディングスタジオ (甲子園)
- マジックスタジオ
- 街時計
- マヨネーズ工場 (甲子園)
- ミルクハウス
- メガネショップ
- ラジオ局
- 理容店 (甲子園)
- 料理スタジオ (東京)
- 冷蔵サポートセンター (甲子園)
- レンタカー
- ロボット研究開発センター

〈五十音順〉
※2018年3月現在

施設概要

キッザニア東京

東京都江東区豊洲2-4-9
アーバンドック ららぽーと豊洲
NORTH PORT3F

キッザニア甲子園

兵庫県西宮市甲子園
八番町1-100
ららぽーと甲子園

営業日 不定休

営業時間 [第1部]
9:00～15:00(6時間)
[第2部]
16:00～21:00(5時間)
完全入替え制

研究1

キッザニア体験によって醸成される「生きる力」
―こども達が考える働く意義とは―

調査・分析 KCJ GROUP 研究調査プロジェクトスタッフ
松川誠一教授(東京学芸大学)監修

調査対象 キッザニア東京及び甲子園に2016年5月～7月に
学校団体で来場した公立小学校10校の小学6年生合計988名

調査時期 2016年5月～7月

調査方法 質問紙調査

研究背景

探索的に様々な職業・社会体験に挑戦するこども達

キッザニアでは、約100種類の職業・社会体験ができますが、どの体験に挑戦するかは、こども達の選択に任されています。それでは、こども達が職業・社会体験を選ぶときに、どのような事柄を基準にして選んでいるのでしょうか。さらには、こども達が自らの未来の「キャリア」について考えるとき、どのような価値観が基準となるのでしょうか。これはとても興味を掻き立てられる疑問です。

文部科学省では、初等・中等教育におけるキャリア発達のあり方を段階的に示しており、小学校は「進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期」、中学校は「現実的探索と暫定的選択の時期※」としています。このことから考えると、キッザニアへ来るこども達は、「探索的」に様々な職業・社会体験に挑戦しているのかもしれません。そして、このようなチャレンジが、将来にわたって人生を築いていく「生きる力」を醸成していると考えられますが、あまり明確な答えは見えてきません。

その答えの一端を見出すべく、今回、キャリア教育の視点を援用して調査・分析を実施しました。調査の結果、こども達は、体験前より体験後の方が、より現実的な観点から将来の職業を考えるようになると同時に、チャレンジを続けることや広い世界で働くことを重要だと考える傾向にあることがわかりました。このことから、こどもの頃に職業・社会体験をすることの大きな意義が見えてきました。

<脚注>
※文部科学省（2011）『中学校キャリア教育の手引き』.

調査方法について

キッザニア体験前後の意識変容をグラフ化

本分析では、体験前と体験後にそれぞれ回答された得点の平均の差を調べるため、対応がある標本によるt検定を実施しました。この検定によって、グループの間（ここでは体験前と体験後の2グループ間）でグループごとの平均得点に統計的に有意な差があるかどうかがわかります。

「統計的に有意」とは、統計学的に「たしかに差があり、それは偶然起こったものではない」といえるかどうかを検定した結果のことです。測定された平均得点の差が生じる確率pが0.01未満であると見なせる場合（$p<0.01$）、その差は「1%水準で有意である」となります。測定された差が生じる確率が100分の1未満であるということは、本当は差がないのに差がたまたま観測されたのではなく、本当に差があるのだと考えてよいだろうということです。本項ではグラフ中の比較する要素の間に**を付けて表しました。

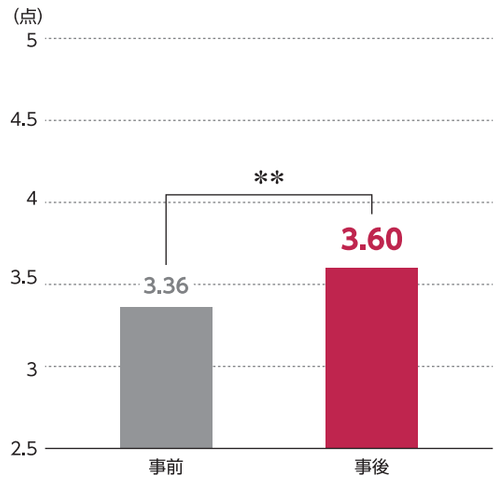
注：質問項目に、「1大切でない」「2あまり大切ではない」「3少し大切」「4大切」「5とても大切」の5件法で回答し、選択番号を得点として、5点満点の指標で表しています。
**:$p<0.01$

職業を選ぶ時に大切なことは？

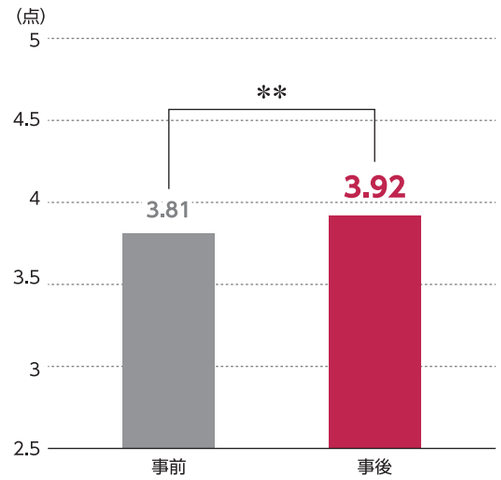
キッザニア体験前後で、15項目について「自分の職業を選ぶときに、次のことはどのくらい大切だと思いますか」という質問を行いました。そして、それぞれの項目の体験前後の平均得点を比較したところ、6項目が統計的に有意な変化を示していました。ここでは、その中から4項目の結果をご紹介します。

キッザニア体験後のこども達は、より現実的に自分の生活と就業環境を考えるようになり、同時に自己の可能性を広げることを大切に思う傾向が見られました。

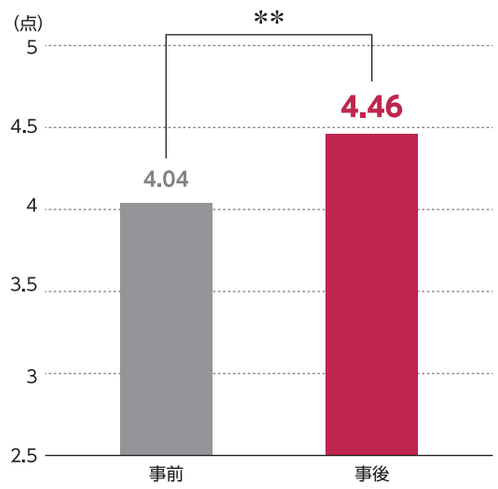
自由になる時間がたくさんある



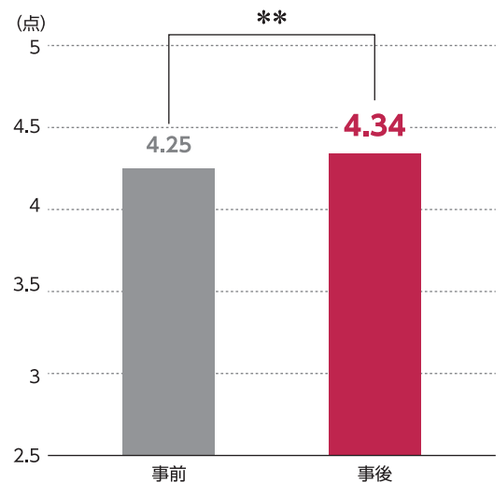
たくさんのお金がもらえる



新しいチャレンジを続けられる



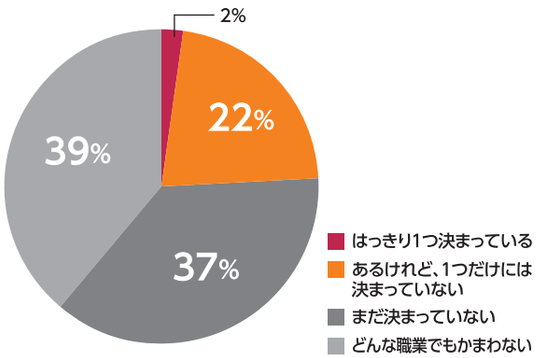
世界中の様々な国で仕事をする



来場前 将来のことについて考えていますか？

キッザニア来場前に、将来就きたい職業について聞いてみたところ、なりたい職業があるこどもは全体の24%にとどまりました。小学校6年生は、キャリア発達段階における「成長段階(※)」であることから、今後の様々な体験を通じて仕事への関心を高めていくことと思われます。

将来就きたい職業



(※)Super, D.E.(1980)A Life-Span, Life-Space Approach to Career Development. Journal of Vocational Behavior 16, 282-298.

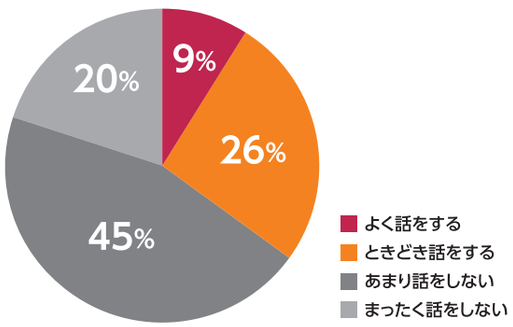
来場前 おうちの人と仕事について話をしますか？

次に、職業について、保護者との会話頻度を質問してみました。回答は4件法で、「1よく話をする」「2ときどき話をする」「3あまり話をしない」「4まったく話をしない」で回答してもらいました。

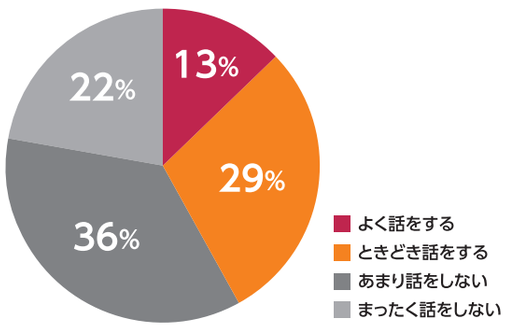
保護者の仕事についての会話の有無については、約7割のこども達があまり話をしない傾向にあることがわかりました。

また、自分が将来就きたい職業についての会話の有無では、「よく話をする」や「ときどき話をする」と回答したこどもは、約4割にとどまりました。

おうちの人の仕事について（保護者との会話頻度）



自分が将来就きたい職業について（保護者との会話頻度）



2017年11月30日「キャリア教育学会国際大会 “IAEVG2017”」にて本調査の発表を行いました。

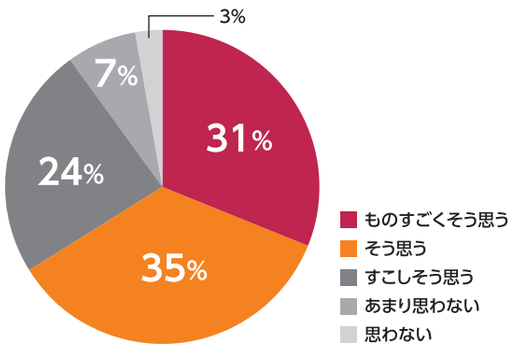
KCJ GROUPの研究調査プロジェクトにより “Why Do We Work? The Gender Differences of Work Values of Elementary School Students in Japan”を研究タイトルとして、学会発表を行いました。この発表では、小学生男女で職業を選ぶ際の価値観にジェンダー差があるという報告を行いました。その結果、本調査について各国の研究者との間で活発な議論が行われました。

来場後 キッザニア体験を通して考える未来

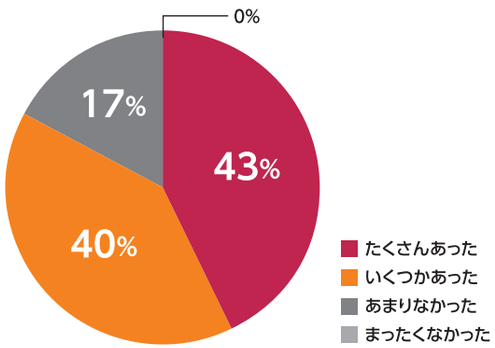
キッザニア体験後のこども達に「将来就きたい職業について、キッザニアへ行く前よりも考えるようになったと思いますか」と問いかけたところ、「ものすごくそう思う」「そう思う」と答えたこども達が66%となりました。

また、「キッザニアに行って、学んだことや自分のためになったことがあったか」と質問をしたところ、83%のこども達が何らかの学びがあったと答えており、その半数以上が「たくさんあった」と回答しています。

キッザニア来場後に将来就きたい職業について考えるようになった



キッザニアでの学びや気づき



アンケートに協力してくれたこども達のコメント

©KidZania

上記の問いに続いて、キッザニアで学んだことや自分のためになったことを自由記述で書いてもらいました。そのいくつかの例をご紹介します。仕事の厳しさとともに楽しさ・やりがいについても理解できたことなどがうかがえます。

- 人とのコミュニケーションや、仕事はみんなと協力しなければいけないということを学びました。
- 自分の特徴を知ることができました。人と接する時には笑顔が大切だと思いました。
- 働く楽しさがわかりました。働いている人が工夫している所をマネしたくなりました。
- お金がどれだけ大切かということを知りました。やりたい仕事がまた1つ見つかりました。
- まだなりたい職業は決まっていないけど、すべての職業が難しい。けど楽しい。
- キッザニアで英語を学びました。将来、僕はテニス関係の仕事をしたいので、英語は必要だと思うので。

キッザニアでの「学び」を「能力」に変えるには

松川誠一 教授（東京学芸大学）

こどもに限ったことではないのですが、人が「学んだ」と実感できるのはどのような時でしょうか。

学ぶということが単純に知識を覚えることであるならば、学び手としてはコンピューターのほうが格段に優れているということになります。近年の人工知能（AI）技術の驚異的な発展を背景として、記憶した知識・情報を日常生活においてどれだけうまく使いこなせるようになるかということに重心を移す動きが世界的に広がっています。2018年度から施行される学習指導要領でも、状況に応じて既存の知識を組み合わせながら自ら課題を設定し解決法を探っていくことのできる能力を身につけることを目標としています。

人間は自分が行ったことを後から再度思い出し、それをもとにしてあれやこれや考え、新しい意味を引き出すことで「能力」を身につけることができます。こうしたことができたときに、私達は何かを「学んだ」と感じることができるのです。

こうした学びは自分ひとりでやるよりも、他者と話し合いながらやるほうがずっと効果的であるということも明らかになってきています。学んだという経験を豊かなものにするためには、学ぶ内容を独り占めしていてはいけないようなのです。

キッザニアを訪問したこども達を例にすると、こども達は多種多様な仕事を通じ、短い時間の中で自分がどうしなければならないのかを考える機会が与えられています。小学校の高学年になれば、キッザニアでの仕事内容を発展させて、より抽象的な事柄についても考えることができるようになってきます。

これらのキッザニアでの「学び」はキッザニアから帰ってきたあとで決まってくる面があるようです。キッザニア訪問後に家族などとキッザニアでの経験についてたくさん話をしたというこどもの方が、仕事や職業についてよりよく考えるようになる傾向があり得ることを調査結果が物語っています。

キッザニアでの出来事をこども達が話す時にはぜひ耳を傾けてあげたいものです。大人の目からは、たわいのない話であることが多いので、忙しいときなどおざなりな態度で聞き流すことも多いかもしれません。しかし、そうした会話が、こども達の「学び」を「能力」に変える大切な瞬間であることを頭の片隅にとめておく必要があるのではないでしょうか。

研究 2

キッザニアにおける英語を使った職業・社会体験

―実践的な英語でのコミュニケーションがもたらすもの―

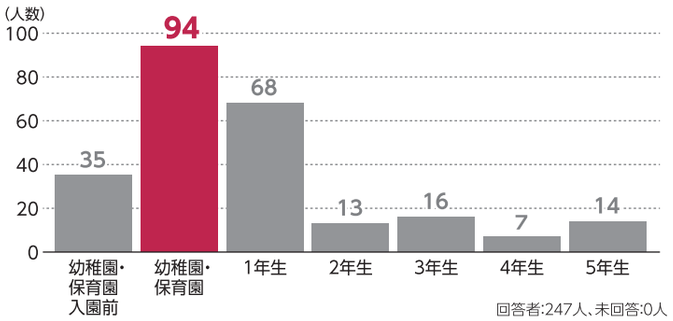
調査・分析	KCJ GROUP 研究調査プロジェクトスタッフ アレン玉井光江教授（青山学院大学）全体監修 根本朋子准教授（テンプル大学大学院）調査票・分析監修
調査対象	茨城県、千葉県、大阪府の国立・公立小学校の5～6年生 合計247名
調査時期	2017年9月～11月
調査方法	質問紙調査

研究背景

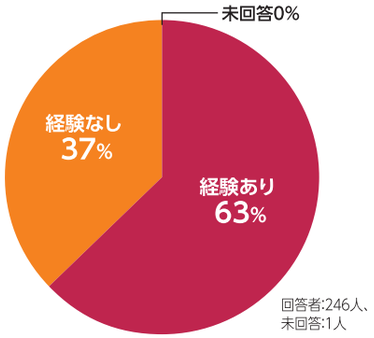
英語経験の背景

アンケート回答者の半数以上は幼稚園・保育園への入園前後に初めて英語学習を経験しています（下図棒グラフ参照）。また63%が幼稚園・保育園、小学校以外での英語学習経験があると回答しています（下図円グラフ参照）。

初めて英語を習った年齢



幼稚園・保育園、小学校以外の英語学習経験



学校外での英語学習環境（複数回答）

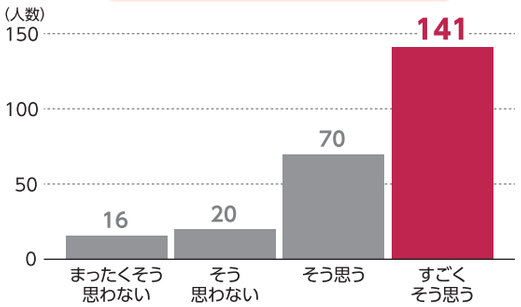
英語学習環境	人数
英会話スクール	80
学習塾	51
家庭教師、スカイプ等の個人レッスン	9
通信教育等、自宅学習	3
英語の幼稚園	2
親と家庭で	1
その他	21

英語学習の環境としては、英会話スクールが半数以上を占め（80名）、次いで学習塾（51名）、家庭教師等との個人レッスン（9名）となっています。また、さらに分析を進めた結果、学習期間は3年以内、週1～2回が大半を占めましたが、中には10年間以上という回答もあり、小学生の段階でも英語学習総時間数の差にばらつきがあるようにうかがえました。

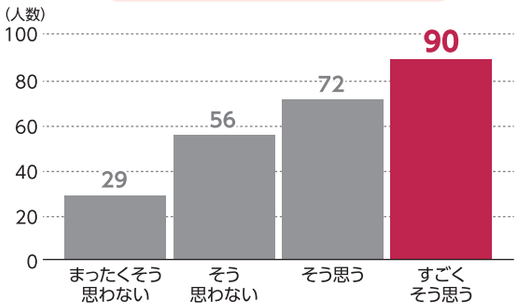
英語への関心

英語への関心としては、「英語をもっと話せるようになりたい」「海外の人とも英語で交流をしたい」との問いに“すごくそう思う”と答えた人がもっとも多く、英語を話す機会をもちたいとする回答が多く寄せられました。

英語をもっと話せるようになりたい



海外の人たちと英語で交流したい

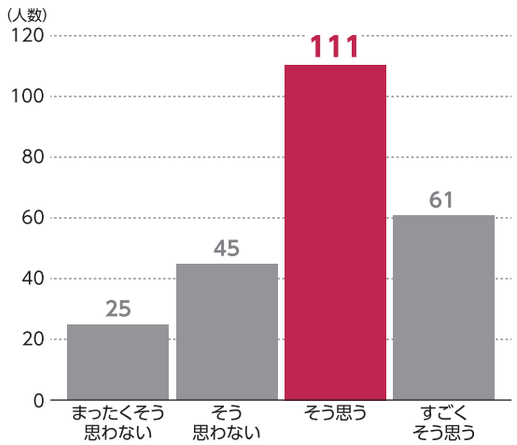


キッザニアでの英語発話体験

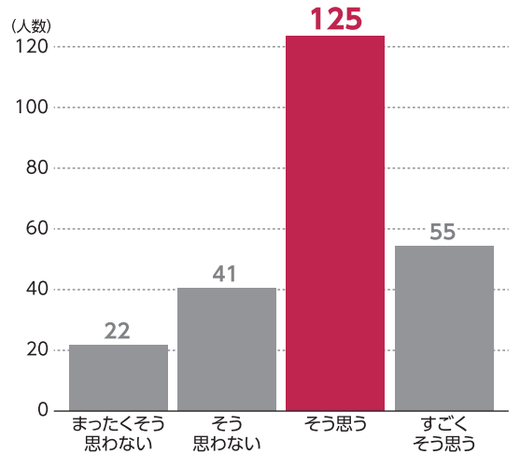
「キッザニアを訪れる機会があったら、また英語アクティビティをやってみたいと思いますか」という質問に対して、172名が“そう思う”、“すごくそう思う”と回答しました。多くの参加者がキッザニアでの英語体験を好意的に感じたことがわかります。なお、記述式回答欄に寄せられた答えでは、アクティビティ中に使った英語表現として、挨拶、自己紹介、名前や年齢の質問、相づちや声かけ、返事、お礼、仕事の説明、物の名前や形容、左右などの方向、数字などが多く挙げられました。このうち、挨拶、自己紹介、相づちやお礼などについて、多くの回答者が、学校で習った表現がキッザニアでのアクティビティで役立ったとしています。

また、「スーパーバイザーの英語が理解できたか」「全ての動作を行えたか」との質問に対して、多くの回答者が英語を理解でき、指示された行動をできたと回答しています。今回の調査では、アクティビティ中に使用される英語のほとんどが理解されていたようです。しかし、約4分の1の回答者が指示などがよく理解できなかったと回答しており、次回以降、英語アクティビティに参加したいとは思わないという意見と重なる部分も見えます。

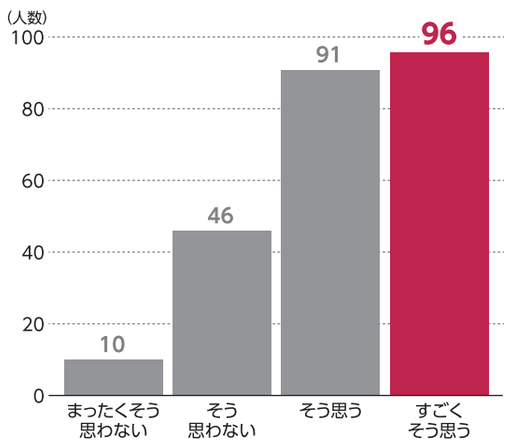
次回も英語アクテビティをしたい



スーパーバイザーの英語が理解できた



英語で言われた全ての動作を行えた



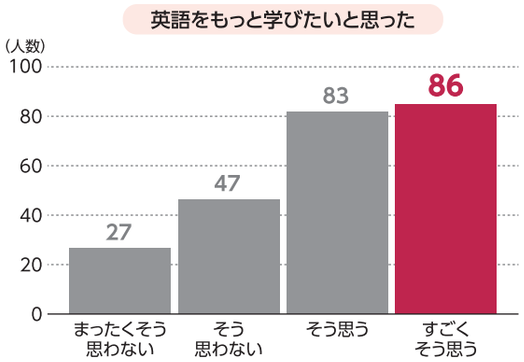
根本朋子准教授からのコメント

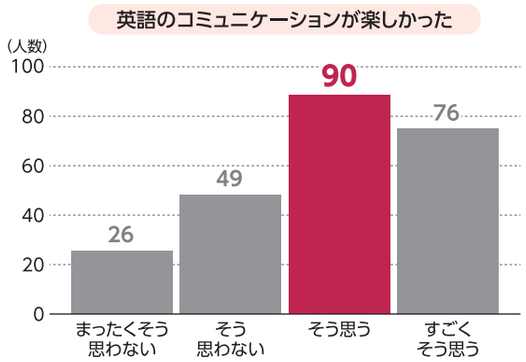
調査対象はランダム選択ではありませんが、キッザニアに訪れるこども達がどの様な体験をし、どの様に感じているのかを学びたいという我々の思いに応えてくださった3小学校の教員、学生の皆さんのご協力により得た貴重なデータです。また、あくまでも基本的な事柄の調査結果です。しかし学習指導要領が大きく変化する時期に、小学生という年齢群を対象とした研究データの収集は困難であり、その点では、本調査が行われた意義は非常に大きいと言えます。

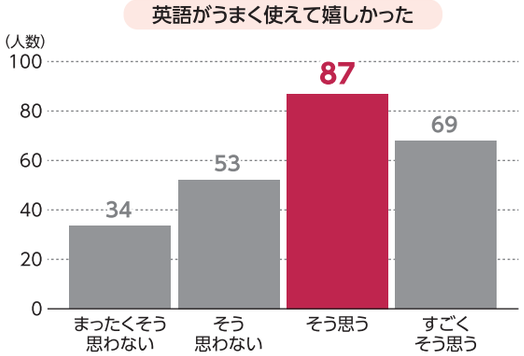
※未回答者はグラフに表示なし

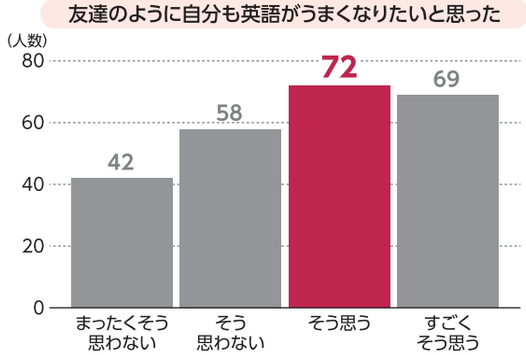
キッザニアでの英語発話体験と学習動機

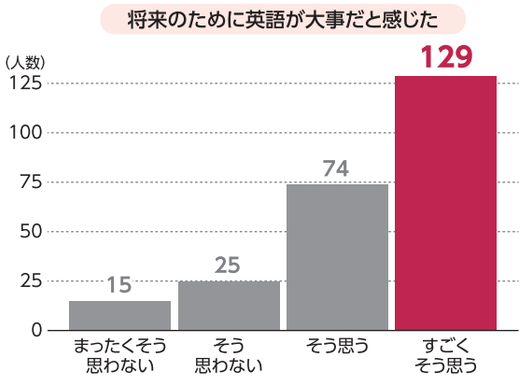
キッザニアでの英語アクティビティ体験を通して、「もっと学びたいと思った」「英語を話すことが楽しかった」と多くの回答がありました。こうした英語アクティビティ体験が英語の学習意欲の動機付けになる可能性を示していると言えます。キッザニアの職業・社会体験で英語を使うことにより、自身の将来において英語を学ぶことの重要性を8割以上の回答者が感じたようです。また、その思いは約6割の回答者が自身の英語レベルに満足しなかったという回答に反映されていると受け取ることができます。

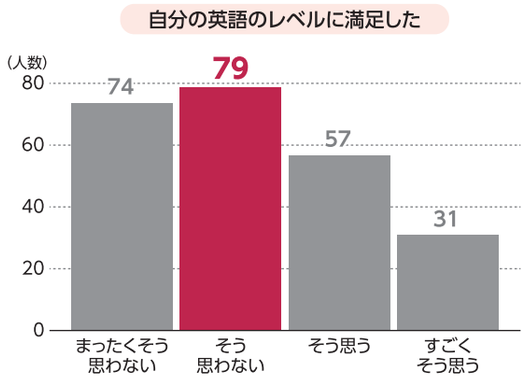












心動くリアルな英語体験が、こども達の学習意欲を高める。

［特別インタビュー］
アレン玉井光江 教授
（青山学院大学文学部）

英語を「体で覚える」キッザニアでの職業・社会体験。

―キッザニアをご覧いただいた際に、とてもユニークな場所だとおっしゃられていました。職業・社会体験と英語の組み合わせは、珍しいものなのでしょうか？

アレン　キッザニアは、こども達の職業・社会体験の場として作られた施設です。そこに英語教育を取り込んだという形ですので、English Villageなどのように英語教育を主とした施設とは、だいぶ違うものだと感じました。

まず、施設が本格的であるということ。学校の教室では作れないような設備、リアルな設定の中で、英語を話すという部分がユニークです。仕事の過程と結果を得ることの達成感の中で英語を使うことに大きな意味があります。

職業・社会体験という一連の流れの中で、必要になる英語表現があります。流れの中で求められる表現ですから、事前に学習しておくことはできません。言葉は、文脈の中の必然的なやりとりの中で初めて育っていきますので、リアルなコミュニケーションの場で必要な言葉が引き出されるのはとても大切です。

―キッザニアのように、リアルな設定の中で英語を話すことに大きな意味があるんですね。

アレン　例えば、小さなこどもが消防士になるというのは「現実的」という意味においてはリアルではありません。しかし、「ここに集合してください」「ここでホースをもってください」と言う言葉に従って行う体験はリアルなものです。体を使いながら言葉を使っていくというのは、言葉を覚える上でとても大切なことだと思います。

私は「頭言葉」「体言葉」という表現を使っていますが、学校ではどうしても「頭言葉」になりがちです。キッザニアは「体言葉」で英語を“体験”できる場ですから、こどもにとってはより理解しやすいのではないでしょうか。仕方のないことですが、そういう体験はなかなか学校ではつくれないと思います。

—キッザニアでは日本人のスーパーバイザーが英語で職業・社会体験を提供します。ネイティブスピーカーではありませんが、先生はどうお考えになりますか?

アレン　キッザニアのスタッフであるスーパーバイザーの方々は、必ずしも英語のネイティブである必要はないと考えています。必要なのは、キッザニアという施設や職業・社会体験の仕組みを理解し、パッションをもって運用できることでしょう。例えば、私のような児童英語教育の専門家が、スーパーバイザーに替わっても役に立ちません。英語を教えることが中心になってしまいますから。そういう意味では、皆さんに自信を持っていただきたいです。

今や英語は世界共通語になっていますから、ノンネイティブ同士が英語で会話することも珍しくありません。ただし、言葉は通じなければ意味がありません。大事なことは、「クリアボイス」「ジェスチャー」「アイコンタクト」の3つを意識すること。私は、慶應大学の田中茂範先生がおっしゃっている「my English」という言葉を好んで使っています。誰の言葉でもない、自分の言葉としての英語を一人ひとりが作っていくという発想です。英語は急には伸びません。その中で、目の前の人とつながりたいと思ったときに大切なことが、先ほどの3つの要素です。それが「my English」を育てることにもつながります。スーパーバイザーの方々にも、常に意識してほしいと思います。

「点」での体験を「面」に。学校教育とのさらなる連携に期待。

—調査結果を見ると、キッザニアでの体験後に「もっと英語のアクティビティを体験したい」「英語をもっと学びたい」と思ってくれたこども達が約7割もいました。キッザニアでの体験は、英語を学ぼうという気持ちに結び付くものなのでしょうか?

アレン　英語を学ぶ意味を実感することがとても重要です。「my English」が育っていき、ドンと心にきたときに初めて、こども達は「ああ、このために英語を学ぶんだ」ということを理解します。文字が読めるようになることも、小さな達成感はありますが、キッザニア内で仕事をやり遂げることは、学校とはまったく違う体験です。実際の職業の中で使われる英語表現に触れることは、こども達にとって素晴らしいことだと思います。実体験での「できた(できなかった)」という感覚は、より貴重なものになるでしょう。ただ、こども達は、そうした体験と学校の英語教育を結び付けるところまではいきません。今は、体験が点でしか存在していないため、それらを線にし、そして面にしていく必要があると考えています。

—児童への英語教育という観点から、キッザニアに今後期待することはありますか?

アレン　先ほどお話ししたように、学校教育との連携をさらに深めていただきたいですね。キッザニアでの体験を学校でもう一度詳しくふり返る、というようなことがプログラム化できれば、学習は深まり、こども達の「my English」が育っていくのではないでしょうか。ポイントは、「できたのは(できなかったのは)どうしてだろう?」とこども達の目線で考えさせることです。教室での学びが「できた」につながることが理解できれば、自主的に学ぶきっかけになるでしょう。キャリア教育は小中学校でも大きなテーマの一つ。キッザニアと学校教育が連携することで、点だった体験が面になるようなプログラム作りを期待しています。

研究 3

キッザニア就業経験による学生スーパーバイザーの気づきと成長

調査・分析	KCJ GROUP 研究調査プロジェクトスタッフ 甲斐知彦教授(関西学院大学)監修
調査対象	キッザニア甲子園に勤務している大学生・短大生・専門学校生及び高校生のスーパーバイザー187名
調査時期	2017年10月～11月
調査方法	テキスト内容分析

マニュアルを超えた価値の創造が求められる現代

キッザニアでは社会人のほか、大学生・短大生・専門学校生、そして高校生が「スーパーバイザー」として来場するこども達の職場の先輩役となり、職業・社会体験をサポートします。こども達の体験の質は、スーパーバイザーの対応と大きく関係することになるため、失敗は許されず、自ずと本格的な仕事になります。

社会人になる前の就業経験がない、もしくは就業経験が浅い学生に責任ある仕事を任せるために用意されるのが基本オペレーションをまとめた「マニュアル」ですが、近年、情報革命やテクノロジーの発展は著しく、これまでのモデルではない、マニュアルを超えた価値の創造、つまり「イノベーション」が求められています。

私はこれまでに大学生を対象としたキッザニアでの就業体験、いわゆるインターンシップにおける教育的効果を調査してきました。その中で確認できたことは、キッザニアでの就業体験によって学生達の「社会人基礎力※」と「コミュニケーションスキル」が向上するということです。

人材育成という領域では、組織行動学者のデービッド・コルブ氏が提唱した「経験学習」がよく知られています。つまり、「体験→振り返り→気づき→一般化→応用」というサイクルに沿うことで、学びがより深くなるというものです。キッザニアでの学びはまさに経験学習であり、マニュアルを超える「イノベーション」につながると考えています。

今回の調査では、キッザニアで働くスーパーバイザーが日々の就業の中でどんなことを考え、そこにどんな気づきがあるのかを検証しました。

(関西学院大学 甲斐知彦 教授)

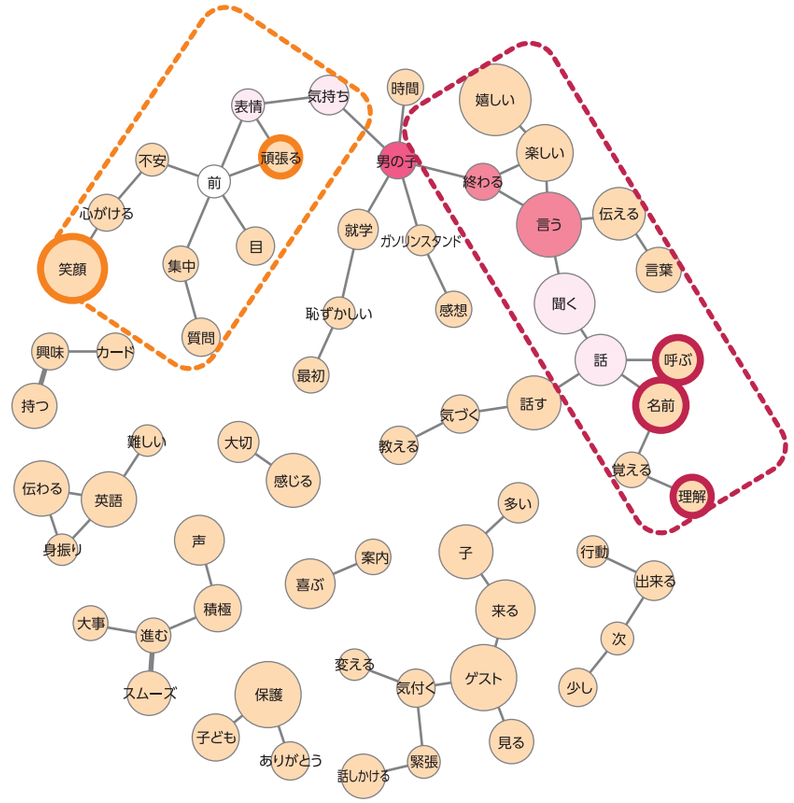
<脚注>
※「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力(12の能力要素)から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年から提唱しています。
(出典:経済産業省ウェブサイト:http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/)

調査方法について

スーパーバイザーのコメントを分析し、多用された語の関係性を視覚化

今回の調査は、キッザニア甲子園のスーパーバイザーとして勤務する大学生・短大生・専門学校生・高校生から得たコメントの合計629件を、「大学生・短大生・専門学校生(就業1年未満)」と「大学生・短大生・専門学校生(就業1年以上)」、そして「高校生」の3グループに分け、「KHコーダ」を用いて分析しました。また、出現パターンが類似した語の関係性を視覚化する「共起ネットワーク図」を援用しました。強い共起関係ほど太い線であらわされ、出現数の多い語ほど大きな円で描画されています。色は、オレンジ・白・ピンクの順に中心性が高くなることを示しています。

参考文献　樋口耕一, 2014,『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』(ナカニシヤ出版)



笑顔×頑張る

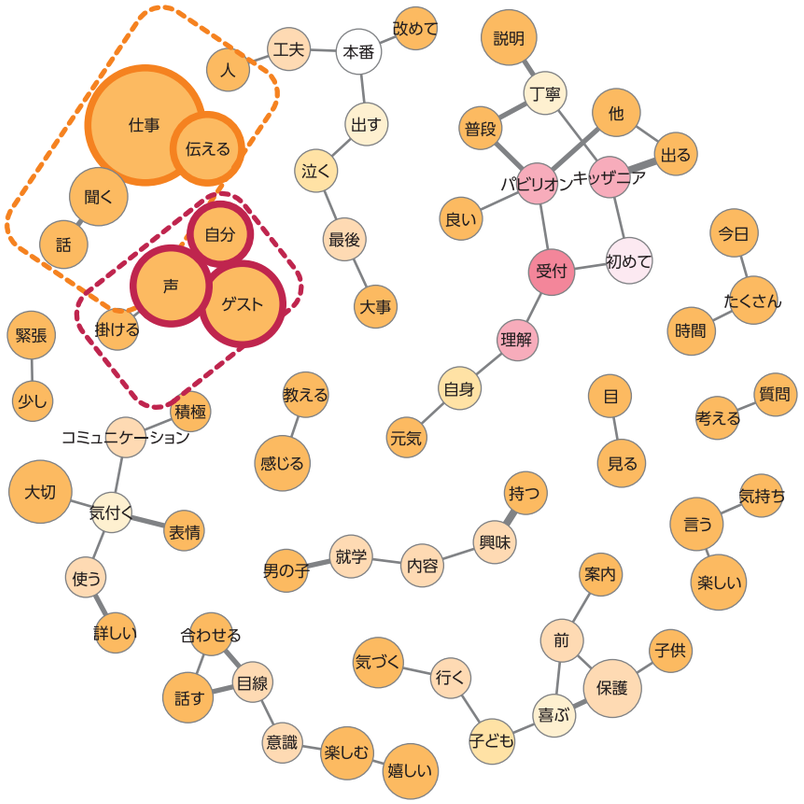
- 笑顔で伝えるとスムーズに伝わることを学んだ。
- ひらがなを話す事が難しい未就学の子でも、自分の笑顔や顔の表情でこちらの反応に気づいているんだなと思った。

名前×呼ぶ×理解

- 名前を呼んだときと呼ばないときでは、こども達の意欲と反応がまったく違う。
- こどもの名前を覚えて呼んであげることによって、話を理解してくれるスピードが上がった。名前を呼んであげることが大切だと感じた。

このグループのコメントには、「話しかける」「教える」といった業務の基本オペレーションに関する語が多く見られました。就業より1年未満と経験が浅いため、業務の基本を習得することに意識が向けられているからだと考えられます。その中で、「嬉しい」「楽しい」といった業務への前向きな語や、「笑顔」「名前」といった業務での工夫に成果を感じていることがわかります。

Ⅱ.大学生・短大生・専門学校生(就業より1年以上)のコメント分析



仕事×伝える

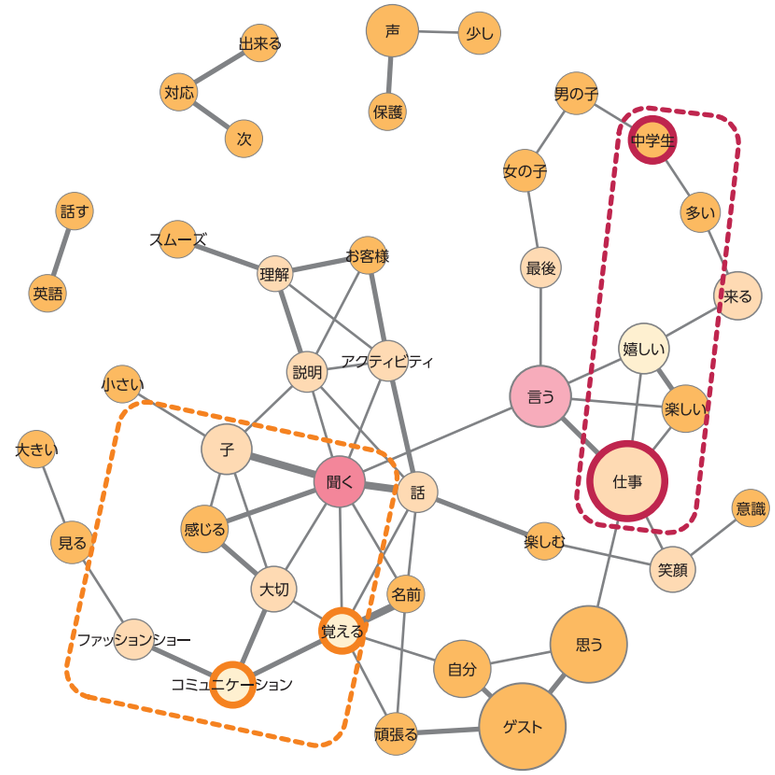
- 新人のトレーニングでは、自分だけでなく他のスーパーバイザーの意見も聞くことで客観的なアドバイスができると思った。
- 後輩に1つアドバイスするにしても、どのように伝えるのか難しいと思いました。

自分×ゲスト×声

- ずっと泣いていたゲストに「お母さんのために作ろう」と声をかけると最後まで頑張ってお仕事をしてくれた。
- 初来場のゲストの方は最初緊張されている方が多いので、その方を安心させたり興味をもっていただけるようなお声掛けが大事だと思った。

就業期間が1年を越えるグループでは、各パビリオンでの組織に関することや、こども達の仕事体験による気づきを深めようとするコメントが多く見られました。既に基本オペレーションの習得は終え、より高い目標、すなわちミッションやホスピタリティの具現化に向かう姿勢を感じ取ることができます。

Ⅲ.高校生スーパーバイザーのコメント分析



コミュニケーション×覚える

- ゲストが自分のことを覚えていてくれて、一人ひとりとコミュニケーションをとることの大切さを感じた。
- アクティビティの着替えの時にゲスト同士でコミュニケーションをとっているのを見て、私たちとだけではなくゲスト同士のコミュニケーションも大切にしていこうと思いました。

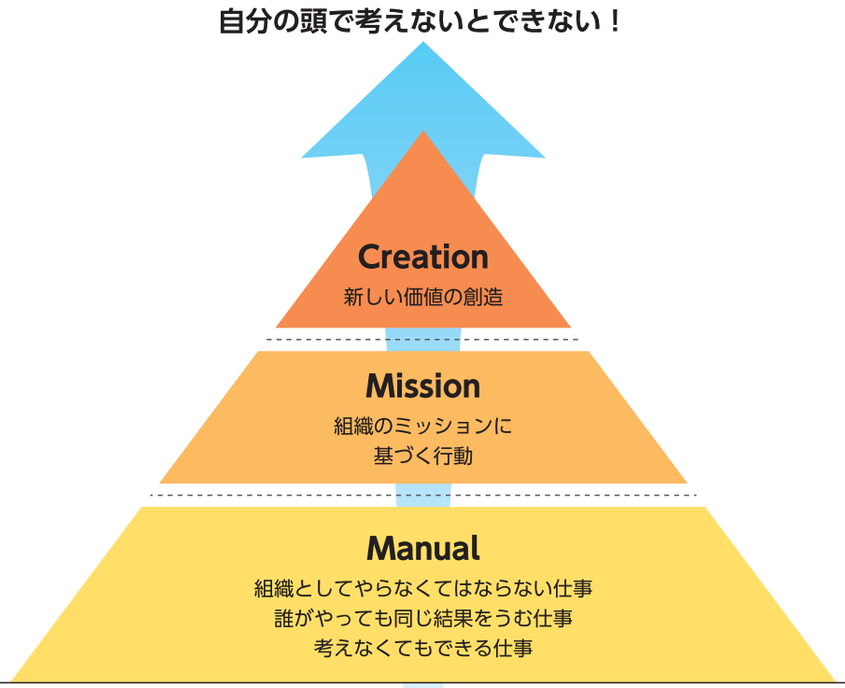
中学生×仕事

- 中学生がしっかりしていると感じた。キッザニアの街がそうさせているのではないかと思った。
- 歳が近い中学生の方が多く来られたのですが、僕よりも大人びている方がとても多くて驚きました。自分もすこし落ち着いた目線から仕事ができたので、いい経験になりました。

高校生からは、コミュニケーションの大切さに関連する語が多く見られました。さらに特徴的だったのは、他のグループでは見られなかった「中学生」という語が多かったことです。最近までゲストであった自分を重ねつつも、ゲストである中学生に対して、今ではサービスを提供する側としてまなざしを向けているようです。

キッザニアでのスーパーバイザー体験と人材育成モデル

図　これからの時代に求められる人材



私は毎年、学生の研修指導のために2週間毎日キッザニアに通って場内を見て歩きました。その中で上図に示すような人材育成モデルを発想するようになりました。すなわち、これからの時代を担う人材には、基本オペレーションのマニュアルをしっかり遂行できる能力（Manual）、ミッションに沿って新たな問題を発見し解決する能力（Mission）、そして、それらに支えられて新たな価値を創造する能力（Creation）が必要だと考えています。今後、テクノロジーの大いなる進化によって、マニュアルで行われる仕事の多くが機械に取って代わられる時代が訪れると予測されます。また、ミッションに沿って新たな問題を発見し解決する力さえもAIが手に入れるのではないかという勢いです。だとすると、私たちはなんとしても創造力（Creation）を手に入れなくてはなりません。今回の調査は「キッザニアでのスーパーバイザー体験」はその手段になる可能性を感じさせる結果となりました。

（関西学院大学 甲斐知彦 教授）

保護者・教員の皆様から寄せられた こども達の変化・成長エピソード

キッザニアでの体験を通じ、こども達が変化や成長をしたというたくさんの喜びの声が保護者様や教員から届いています。

保護者

強いこどもに成長

何事もすぐあきらめてしまう子だったのですが、忍耐強くなり、目標を決めて行動ができるようになりました。

人前で話すことが得意に!

学校でイベントの司会に選ばれました。キッザニアでDJの仕事などをしたおかげだと思います。

思いやりをありがとう

プレゼントはもらうものだと思っていたこどもが、母の日にキッゾを使ってプレゼントを買ってくれました!

教員

交流の幅が広がる

仕事やお金の仕組み、時間の使い方などを学べることはもちろん、他校の生徒と交流できる点もメリットだと感じています。

新潟県　小学校教員

英語の実践の場としても

英語で体験するプログラムも充実しており、生徒が実際に英語を使う機会が持ててよかったです。

青森県　中学校教員

社会で生きる厳しさを体得

生徒達が実社会に触れることにより、仕事の厳しさを知ると同時に、労働に対する見方・考え方、生きていくことの厳しさの一部を体得できたのではと思います。

愛知県　中学校教員

おわりに

キッザニアでこども達が体験することは多岐にわたります。これまでもその体験によって得られた効果を、大学研究機関などにご協力いただき、多角的な研究をしてまとめてまいりました。本誌では、こども達の「生きる力」や「英語学習」への積極性向上及び、スーパーバイザーの就業経験による成長について、述べさせていただきました。

キッザニアでは、こうした研究的側面を［エデュテインメント］施設の重要な役割の一つとして認識しています。今後も、調査結果を皆様と共有し、「こども達の成長のために何ができるか」を社会に発信していくことで、キッザニアを支えてくださるゲストの皆様、教育関係者の皆様、そしてスポンサー企業の皆様のご支援にお応えしていきたいと考えています。

最後になりましたが、今回の調査研究にあたって監修・ご協力をいただきました東京学芸大学の松川誠一教授、青山学院大学のアレン玉井光江教授、テンプル大学大学院の根本朋子准教授、及び関西学院大学の甲斐知彦教授に心より感謝申し上げます。

KCJ GROUP 株式会社
代表取締役社長兼CEO

KidZania Tokyo

KidZania Koshien

キッザニアの窓
新しいWEBメディアスタート！
キッザニアの窓 検索

© KidZania

発行元・KCJ GROUP 株式会社　東京都中央区佃 1-11-8 ピアウエストスクエア 3F
[本件に関する問い合わせ先] KCJ GROUP（株）ブランディング部 mail：research@kidzania.jp
©KidZania All Rights Reserved.